

## 多摩大学アジアダイナミズム濟州島研修視察

An Activity Report of the Educational Visit to Cheju Island  
in Tama University Asia Dynamism Program

趙 佑鎮\*<sup>1</sup>      諸橋 正幸\*<sup>2</sup>      金 美徳\*<sup>3</sup>  
石川 晴子\*<sup>4</sup>      大森 拓也\*<sup>5</sup>      奥山 雅之\*<sup>6</sup>  
武井 徹\*<sup>7</sup>

Woojin CHO      Masayuki MOROHASHI      Midok KIM  
Haruko ISHIKAWA      Takuya OMORI      Masayuki OKUYAMA  
Tohru TAKEI

### 1. 研修の目的

現代の産業界が最高学府たる大学に望むものは、時代の課題をビジネスの現場で解決できる問題解決力をもった人材の育成と、アジア・ユーラシアダイナミズムというパラダイム転換の時代を創造する志や、「地政学的知」を身に付けた人材の育成である。この教育目的達成のため、多摩大学アジアダイナミズム濟州島研修視察として隣国である韓国において世界の58カ国、延べ4000人（実数1500名）が集った「濟州平和フォーラム2014」（5月29日（木）～30日（金））に参加した。

この研修での教職員の主な教育活動目的は、学生の引率指導のほか、濟州平和フォーラム2014への参加、濟州島エコパーク、濟州民俗村並びに濟州道民俗自然史博物館の視察、日本の自治体議員、経営者等で構成された日本経営者訪問団との交流である。

\*1 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

\*2 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

\*3 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

\*4 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

\*5 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

\*6 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

\*7 多摩大学学生課 Student Affairs Division, Tama University

## 2. 研修日程及び内容

(第1日目 5月29日(木))

- 15:30～17:00 ▶ フリドリヒナウマン財団のセッションに参加。テーマは『北東アジアの歴史和解と平和構築の課題』(Historical Reconciliation and Challenges for Establishing peace in Northeast)
- 17:20～18:40 ▶ 内田裕久 KSP 社長、大竹美喜アフラック最高顧問・チャンテピョン前韓国農林水産部長官パネリストによるセッション(司会は趙教授)に参加。テーマは『グローバルエコノミーと先端ベンチャーの成功戦略』(Glocal Economic Exchange and Business Strategy of Venture Industries)
- 19:00～20:20 ▶ 濟州フォーラム組織委員長主催による晩餐会に参加。多摩大学訪問団及び日本経営者訪問団がテーブルを囲み食事を取った。
- 20:40～22:00 ▶ チャン・マンギ人間開発研究院会長、大竹美喜アフラック創業者による日中韓経営者交流会議に参加。テーマは『新しいアジア設計と日中韓企業の協力』(Exchange Meeting of CEOs' from Korea, China, and Japan)

(第2日目 5月30日(金))

- 9:00～10:20 ▶ カーリー・フィオリーナ氏(元ヒューレッドパカードCEO)による特別講演に参加。テーマは『起業家精神と女性リーダーシップ』(Entrepreneurship and Female Leadership)



- 10:40～12:00 ▶ 日中韓3国協力事務局のセッションに参加。テーマは『東北アジア地域統合—過去、現在、未来』(Reconciliation and Integration in Northeast Asia-Past, Present and Future)



- 12:00～13:20 ▶ 昼食。多摩大学生は「日米韓次世代リーダー交流会会議」(Young Leaders Meeting: Global Leaders' Challenge and Cooperation for Designing New Asia)に参加。米国、韓国の代表者が発表した後、日本代表として経営情報学部3年生の米倉聡之介(趙ゼミ)君が図解を使って「アジア時代に向

けた日本の役割」を発表。

13:20～14:40 ▶ 韓国外交部セッションに参加。テーマは『気候変動対応と経済的影響』

15:00～16:20 ▶ 日中韓3国協力事務局のセッションに参加。テーマは『低炭素成長のための協力モデル構築—日中韓都市間協力可能性』

16:40～18:00 ▶ 多摩大学主催セッション参加。下村博文文部科学大臣による基調講演、川合アユム One World 会長・行徳哲男先生・ジョンドック前韓国産業資源部長官パネリストによる議論。テーマは、『アジアの平和と日韓関係』(Korea-Japan Relation for Asia Peace)

18:00～19:20 ▶ 済州国際自由都市開発センター理事長主催による晩餐会に参加。

19:20～21:20 ▶ 下村博文文部科学大臣を囲む懇談会。日本経営者訪問団並びに多摩大学生が下村大臣と質疑応答。懇談会後記念撮影



(第3日目 5月31日(土))

10:30～11:30 ▶ 済州民俗村を視察

12:00～12:30 ▶ 韓国料理店にて昼食

13:00～14:30 ▶ 済州島エコパークを視察

15:00～16:00 ▶ 済州道民俗自然史博物館を視察  
視察後、帰国。



### 3. 研修視察の成果—学生感想文から

本研修視察の目的は、本学が掲げる「多摩グローバル人材」、「アジアユーラシアダイナミズム時代を創造する志と地政学的知をもった人材」、「アジアダイナミズムに真正面から向き合えるプロジェクトマネジメント人材」の育成の一環として、学生たちに実際の海外体験を通じて具体的人材像を捉える機会を提供することである。今回の研修視察を終えた学生たちに感想文の提出を求めたところ、研修目的がある程度達成できたことが確認できた。

(大学院経営情報学研究科2年生)「各国要人によるハイレベルな議論とその内容の幅の広さが印象深かった。北東アジアのグローバルな視点での重要性、政治外交課題、歴史認識、TPP等の貿易問題、さらには気候変動等の問題について見識を深める絶好の機会であった。領土を巡る対立に関しては、明確な答えは短時間で得られないものの、パネリストからは大変建設的な意見が多く出されていたことは大きな成果である。」

- (2年生)「フォーラムに参加する前までは、中国・韓国の国民は日本と関係を良くしようとする気はないと思いでいたが、セッションを聞いていくうちに3カ国の政府の意図とは関係なく民間は互いが協力して良い関係を築いていこうとしていることがわかった。残りの大学生活の日々、より勉強して、本格的に海外留学も考えていこうと思うようになった。」
- (3年生)「セッションで得られた知見としては、グローバル化に伴う貧困問題と日本の農業の可能性についてである。特に、最近の農業はモノを売るだけでなく、バイオ科学や食品産業との融合と連携が重要ということがわかった。絶えず、世界の情勢について勉強したい。」
- (2年生)「各セッションでは色々な国の学者が話しており、各国の問題の捉え方の違いが存在することがわかった(例えば、歴史や領土問題)。どのセッションでも各国の協力関係や若者のパワーの必要性が強調されていた。グローバル化した今、どの分野においても日韓は互いの協力を必要としており、例えば、企業間協力において互いを補っていく必要性を感じた。アジア時代を日韓が共に切り開くことができるよう願う。濟州島の現地学生と交流があり、言葉の壁が存在しないのではないかと思うくらい楽しく話した。」
- (3年生)「濟州フォーラムでの様々な議論を聞き、今後はアジア視点での、政治、国際問題、歴史について積極的に学んでいこうと思った。外国語でのコミュニケーションがさらにできるよう勉強する意欲が生まれた。」
- (3年生)「カール・フィオリーナさん、下村文部科学大臣等の著名人の講演や討議は、内容が濃く、表面的な視点でしか物事の問題点を観ることができなかつた自分にとって、本質を観る力を身につけるきっかけになればと思っている。異文化に触れたことで、日本の良いところ悪いところを気づいたし、皆同じ人間であるという当たり前のことも実感できた。商店街での現地人との対話も思い出になった。」
- (3年生)「下村文部科学大臣の講演のなかで、中国の台頭におけるアジアのパワーバランスの変化に対し日韓がどうリーダーシップを発揮していけばよいかの話や、日韓国交正常化50周年という記念の年に日本は韓国とどう上手く向き合うのか等、大変示唆になった。多くの日本の経営者と地方議員との交流は、最も有意義であった。私の拙い英語でも、様々な国の外国人と会話することができた。反日感情の強いと思っていた韓国と中国の方とも、その認識を忘れてしまうぐらいフレンドリーでとても楽しく時間を過ごせたのだが、私が理想とする東アジア共同体の実現も全く不可能な問題ではないと思った。」
- (4年生)「英語で行うセッションに参加し、自分の英語能力を試す機会を多く得たことがよかった。専門的な英語の内容を長時間聞ける集中力を今後はより増すようにしたい。自分の進路に影響を与えた哲学者の行徳哲男先生と対話できたのがよかった。今回の研修に参加したことによって、私はよりいっそう「強い人間」になれそうな予感がした。」
- (3年生)「アジアの平和発展を真剣に思う多様な人々が互いを尊重し、認め合う素晴らしい空間を体験することができ、私の価値観を大きく変えてしまうような有意義な時間であった。日本の常識が世界の常識ではないことがわかった。」
- (1年生)「下村文部科学大臣がとても明るく一緒に写真も撮ることができ嬉しかった。まず日韓がアジアの発展のために協力し、互いを知るべきと思った。中国の人や韓国の大学院に在籍している日本学生とも留学に関する話ができてよかった。最終日の濟州島観光も気持

ちよく、また韓国に旅行に行きたいと思った。」

(2年生)「セッションでの各国代表者の発言内容は難しかったが、大学で勉強した内容と関係していたので理解が可能であった。グローバル化とアジアについての見識はしっかり身につけていることを確認できた。ホテルの部屋や食事は贅沢で満足した。韓国の人は面白い方が多く、また行きたいと感じた。多摩大の先輩から後輩、社会人の方と接して友達も増えた。」

(3年生)「日本、韓国、中国、米国の大学生交流の場で「アジア時代における日本の役割」という内容をスピーチしました。ゼミでのスピーチ内容の準備作成から実際にスピーチするまでの全てが私にとって勉強でした。緊張して自分の番を待っている中で、各国スピーカーは非常に流暢な英語で堂々とスピーチをしていて驚かされました。無事スピーチを行いました。自分にはグローバル社会を生きていく上で課題山積だと認識しました。社会に出て行く前に、こういった場面をもっと経験するべきであり、英語能力は必須だと再認識しました。フォーラム参加によって多くの人に出会うことができました。日本訪問団の中の複数の方にも名刺をいただき「連絡してくれ」と言ってもらえました。また、ジョージワシントン大学の学生達とも連絡先を交換し、今でも連絡をとっています。私は8月から、アメリカの州立大学に留学しますが、この最中にも今回知り合ったアメリカの学生と交流し、なにかできないかと考えています。」

#### 4. 結びに代えて—教職員の総括

今回の研修に参加したことで教職員は今後の教育活動及びアジア観について諸々の示唆を得た。以下においては、研修に参加した教職員の各々の総括を記す。

##### 4.1 金美德教授（教務委員長）

###### ① 韓国済州島で実感したアジア・ユーラシアダイナミズム

済州フォーラムでは、日韓の大臣の発言が注目された。尹外交部長官は、同歓迎夕食会での祝辞で「新しいアジアをデザインするために米国の夢と中国の夢、アセアンの夢、統一に向けた韓国の夢を欧州連合（EU）のように共通したビジョンを持つ“アジア・太平洋の夢”として統合させなければならない」と述べた。

2年連続の参加となった下村文科大臣は、講演「アジアの平和のための日韓関係」で「日本と韓国は、自由・民主主義などの基本的価値観とアジアの平和と繁栄による利益を共有する重要な隣国同士であり、私自身、先頭に立って、文科大臣として様々な場を通して日韓関係、アジアの平和の構築に努力していきたいと述べた。

これらの発言から読み取れるメッセージは、「新しいアジアのグランドデザイン」の必要性、「平和と繁栄のためには一つ一つの努力、点と点をつなげることが大切であること」、「アジア平和を構築するためには日韓の役割が大きいこと」である。

###### ② 各セッションで印象に残ったこと3点

1つ目は、駐韓ドイツ大使の「ドイツ統一の成功の秘訣は、吸収統一でなく、対等統一だ」

という発言である。韓国の朴槿恵大統領は、「統一大当たり論（統一に伴う特需論）」を打ち出しており、韓国主導で南北統一を進める意図があるという見方が大勢を占めている。韓国主導の南北統一は、換言すれば北朝鮮の吸収統一であり、対等統一でないということである。一般的な感情論では、吸収統一が当然であると考えるが、ドイツの経験から対等統一が成功の秘訣であるということになると、朝鮮半島の統一問題を根本的に考え直さざるを得なくなる。朝鮮半島の統一問題は今後、韓国や日本の視点だけでなく、北東アジア、ユーラシア大陸、太平洋地域の視点からもそのあり方を考えていきたい。

2つ目は、韓国の通商戦略は、大胆かつスピーディーで TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）までも視野に入れていることである。韓国は、EU・インド・米国など9の国・地域との FTA が発効しており、実に世界人口の4割である28億人のフリーマーケットを手に入れている。また、12の国・地域とも署名・交渉しており、特に注目されるのが韓中 FTA である。さらに、韓中 FTA の次には TPP 参加も狙っている。

3つ目は、ロシア（アジア信頼醸成措置会議）、中国（上海協力機構）、韓国（ユーラシアイニシアティブ）などが、「ユーラシア経済統合」を念頭に置いた動きをしていることである。東アジア地域包括的経済連携（RCEP）やアジア太平洋経済協力（APEC）などのアジアや太平洋地域の経済圏構築に向けた動きは、誰もが認識していることである。しかし中国とロシアが中心とした上海協力機構が、ユーラシア大陸でプレゼンスを高めているという動きは見落としがちである。

### ③ アジア・ユーラシアダイナミズムへの対応

以上のような「統一に向けて動き始めた朝鮮半島」、「欧州～アジア～米国を繋ぐ東アジアの FTA ハブを目指す韓国と TPP を通じてアジア太平洋経済圏を構想する日米」、「上海協力機構を通じてユーラシア経済統合を進める中ロ」などの動きこそが、アジア・ユーラシアダイナミズムと言える。寺島実郎学長は、「アジア・ユーラシアダイナミズム時代を創造する志と地政学的知を身に付けた人材の育成が多摩大学の役割」だと述べている。今後もこのような教育や研究活動の機会を積極的に提供していく所存である。

## 4.2 諸橋正幸教授（副学長・多摩大研修訪問団代表）

本年で9回目を迎える「平和と繁栄のための済州フォーラム」は、多摩大学としての参加は昨年に続いて2回目である。昨年との大きな違いは、学生主体のセッション「青年指導者会議」が設置され、日本から多摩大学学生が2名 presenter として討議に参加したことである。学部生が国際会議に参加するだけでも教育的意義は大きいですが、自ら主体となってセッションを引っ張っていく体験は貴重である。

多摩大教員と日本経営者に本フォーラムのスポンサーであり韓国大手新聞社の中央日報の社主が加わって、ざっくばらんな雰囲気ですぐ懇談会を行った。そこでは、「歴史教育」と「若者のグローバルな視点」が話題の中心となった。日本において近現代史がまともに教育されていないことはすでに指摘されて久しいが、韓国でもきちんとは教えられていないという。特に、現代史においては政治学者だけでなく経済学者も含めて教育すべき内容をきちんとすべきであるという結論に至った。また、グローバルな視点においては、日本も遅ればせながら国主導での

留学生支援が進められているが、留学だけでなく今回のような国際会議への若者の積極的参加を促すことは重要で、本フォーラムの意義もそこにあると感じた。

#### 4.3 石川晴子准教授（学生委員会委員）

済州フォーラムに参加して、コミュニケーション論的な視点からパブリックスピーキングについて再認識したことを記しておきたい。

今回参加した済州フォーラムは国際フォーラムであり、各分野の専門家が集結しているだけに、高度に専門的な内容のセッションが多くあった。言語は、中国語、英語、韓国語、日本語のいずれかで、ほとんどのセッションに同時通訳がついていた。専門家の話はもともと、専門用語も含めて素人にとっては理解するのが難しいが、同時通訳を通すとさらに難しさが増す。

だがその中でも、専門的な内容で同時通訳を通してでも、素人にも理解できる話をする話し手もいた。そのような人たちに共通していたのは、同時通訳を意識して、短いセンテンスを用い、話の間に適度な間を設けること、そして話の中に、例（example）、エピソード（episode）、経験談（experience）のいずれかまたは複数を取り入れていることだった。事実やデータをそのまま言葉にするだけの専門家は多いが、より多くの人に理解してもらおうと考えるなら、それだけでは伝わらない。工夫が必要だ。具体的な例を出すことで内容がイメージしやすく理解が深まり、ストーリーが入ることで、聴き手はより話題を身近に感じ、話の内容に入り込むことができる。

今回のような国際フォーラムの目的はより多くの人にメッセージを伝え、人を動かそうとするものなので、聴き手の理解を意識した話し方が特に重要だと感じた。上記の example, episode, experience を「3E」とし、パブリックスピーキングに有効な手法として広めていきたいと思いを深めた。

#### 4.4 奥山雅之（地域活性化マネジメントセンター副委員長）

韓国本土からも離れ、中国、日本からも近いという「地の利」を有した済州島が、「平和の島」として象徴的にこうしたフォーラムを開催することの意義は大きい。また、フォーラムにおける各セッションの内容も、具体的な行動につながるものは少なかったといった印象も受ける一方で、近視眼的ナショナリズム情報に触れて生活している日中韓の参加者にとっては、アジア・ユーラシアの風を感じながらのマインドセットとして大きな効果があったと考える。特に、これからのアジアを支える若者にとっては貴重な経験となったに違いない。

経済的融合の深化が政治的緊張関係の緩和に貢献するという本フォーラムの趣旨を鑑みて、1つの提案を行いたい。それは、「日中韓商工会連合会構想」のもとで組成された「日中韓商工会議所首脳会議」として、各国首脳に共通・共同の要請を行うことである。日中韓の有力な商工団体が集結すれば、各国の票田としても無視できない勢力となり、要請の重みはある。そして、その提案では、劇場型政治の駆け引きの中で各国の関係を悪化させるような短期的戦術ではなく、大きな観点からそれぞれの国益にかなう戦略と行動を政治に求めていくことといった内容を期待したい。

最後に、10周年を迎える2015年にむけて、本フォーラムが更なる発展を遂げることを期待

したい。

#### 4.5 大森拓哉教授（学生委員会委員長）

今回初めてこの国際フォーラムに参加した。学生たちにとっては会場へ到着早々いきなりの国際会議であり、日本語通訳は一部あるものの、英語を基本とした会議進行の中で、聴講参加したセッションは真剣に聞き入り、日米韓次世代リーダー交流会会議においては積極的な参加と堂々たる発表を行っていた。

大学の学部時代に、このような大規模な国際会議にまだ予備知識や準備も不十分であることが懸念される段階で思い切って飛び込んでいくことは、彼らにとっては本当に貴重で有意義な体験になったであろうと思われる。加えて現職大臣等に対面するチャンスや晩餐会への出席の機会が与えられるなど、学生にとっては極めて贅沢な研修参加であった。今後は彼らの可能性をますます引き出すべく、各国の大学生同士の交流のチャンスの増加や、英語でのプレゼンテーションなどが実現することを期待したい。

#### 4.6 武井徹（学生課主任）

今回の韓国研修の成果は、主に3つある。まず1点目は、国の政治経済をけん引する政治家やビジネスパーソンから直接レクチャーを受けたことである。2点目は、韓国、アメリカ等の学生の積極的な姿勢を目の当たりにしたことである。彼らは、講演後や交流会会議において積極的に質問をするほか、参加者とコミュニケーションをとっていた。多摩大学はその輪には入れなかったが、世界で通用するグローバル人材には積極性が必要なことを分かったことだけでも一歩前進できたと感じた。3点目は、学生と3日間共に過ごし直接対話することで、現代の学生世代の歴史認識や考え方を学ぶことができた点である。

私は今回の研修ではアジア、米国の歴史文化、経済ビジネス、並びに教育に対する取り組みと日本のそれらとを比較することで、私自身の大学職員としての視野も広げることができた。

#### 4.7 趙佑鎮教授（国際交流委員会副委員長）

上記の学生感想文や教職員の総括で示された通り、各々の知見と示唆、行動するきっかけが得られたことは、本研修の企画責任者として幸いである。学生、教職員、経営者を中心とする社会人の三方が満足できる研修を行うには、専門性を満たす内容、交流ネットワークのきっかけづくり、イベントとしての話題性、日韓関係やアジアの平和といった社会性という諸々の側面から差別化された企画をよく考えるべきであり、参加者の御指摘を参考にしながら来年度の研修を検討していきたい次第である。

最後になるが、今回の濟州島研修視察に当たり、学園を始め、寺島実郎学長、久恒恒一学部長以下教職員の方々に多大なるご支援をいただいた。また、公務に御多忙の下村博聞文部科学大臣及び文部科学省関係者皆様は、フォーラムの講演と学生にとって大事な思い出になる懇談会を受け入れていただいた。この場を借りて、研修視察に参加した教職員・学生諸君を代表して心より深く御礼申し上げますと共に、日韓関係の深化にも貢献していきたい所存である。